

川島忠之助について

——その横須賀製鐵所入所の背景——

富田仁

本邦で最初にフランス文学を原典から翻訳した人物は川島忠之助であった。数年前、この川島忠之助についてつぎのような小文を書いたことがある。

明治十一年六月、川島忠之助はジュール・ヴェルヌの小説『新説八十日間世界一周』前編を翻訳刊行した。原作の第十九章までを前編とし、第二十章以下を後編としてこれを明治十三年六月に出版している。この翻訳の大きな特徴は、フランス語原典からの直接翻訳であったということである。文学書の翻訳の少なかつた時代においてフランス文学を原典訳で翻訳したことはいまから考えにくいほど大変な訳業であつた。訳者の川島忠之助は嘉永六年江戸の本所に生れた幕府御家人の出であつたが、明治元年の末に横須賀の海軍造船所の前身の伝習所に生徒として入り、二年間フランス人から造船技術を学んだあと、通訳として商館や富岡の製糸工場に勤め、松方正義や澁澤榮一の知遇を受けたことから欧州旅行に随行し、やがて正金銀行のリオン出張所長になつたという経歴からみて決して文学者ではなかつた。だが、フランス語に通じ、ユゴー、ミュッセ、コッペなどフランスの文学作品を愛読した人であつた。依田學海を通じて矢野龍溪、半井桃水などと交友を結んだことは忠之助の文人の素質を示している証拠といえようか。

『新説八十日間世界一周』を翻訳するに際して、忠之助は明治九年欧米の旅の途中に立寄つたアメリカのある駅頭の売店で買い求めた英訳本を参照したという。この英訳本には原作にはないかなり長い増補箇所がある。すなわち第三十一章の終り近くに、アメリカの陸軍少佐ジュエーンとという懇懇で親切なアメリカ紳士が出てくるところがそれである。これは英訳者が粗暴で無礼なプロクタ

一大佐に對置させて設定したものとみられ、アメリカでの販売政策の一つとしてそのような考慮がはらわれたものようである。いづれにせよ、こうした加筆部分が忠之助の翻訳にもそのまま入つてきていることに注意したい。

川島忠之助のこの翻訳を契機としてジュール・ヴェルヌの作品の邦訳がさまざまに訳者によつて続々と刊行されるようになった。井上勤『九十七分時月世界旅行』(明治十三年十一月)、鈴木梅太郎『二萬里海底旅行』(同年十二月)、森田思軒『鐵世界』(明治二十年九月)などであるが、その大半が英訳からの重訳であつたことを見落してはなるまい。ジュール・ヴェルヌの作品の翻訳数は明治十一年から十年間に限つてみると、シェイクスピアの十一編について多く、十編を数えている。

イギリス人ファイラス・フォッグという紳士が一夜友人と八十日間で世界一周する賭をする。さまざまな事件に遭遇しながら見事世界を一周したとき、フォッグは五分間超過してしまい、賭に敗れたと思つたが、実は時差のため計算を間違えたにすぎず、むしろ七十八日間で一周していたことが判り、賭に勝つたというのが『新説八十日間世界一周』の内容である。この作品そのものにしてもすでに科学万能の思想を背景にしているが、当時の日本はその新興産業資本に支えられた近代国家としての急速な歩みを急いでいた時代であり、ヴェルヌの作品になにか将来の姿が反映されているように思われたのかもしれない。ヴェルヌの科学小説が多數翻訳されて読まれたという事実の背後にはそのような時代的要求があつたのである。

さて『新説八十日間世界一周』の訳文は正確な逐字訳であり、最近改めて翻訳された江口清氏も「こんど拙訳をこころみるにあたり、読ませていただいたが、なかなかりっぱな訳で」と述べている。つぎに冒頭の部分を引用しよう。

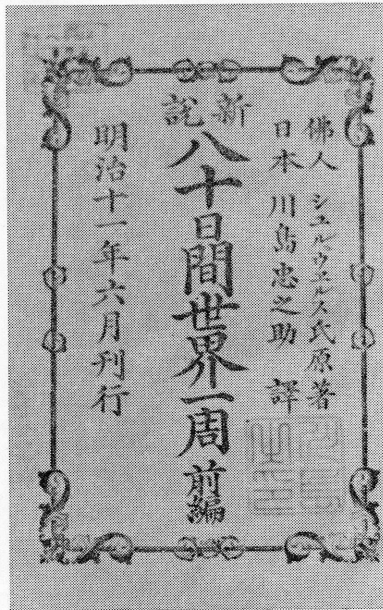
「千八百七十二年中ニ龍動ボルリントン公園傍サヴィルロー街第七番ニ於テ

千八百十四年中シエリダンガ物故セシ家ニ同府改進舎ノ社員ニテ自身ハ勉メテ行状ノ人ノ目ニ立タヌ様注意シアリシモ何時トナク奇癖家ノ名聞轟キケルフアリス・フォッグ氏ト稱スル一紳士ゾ住ヒケル……」

参考までに同一個所を江口氏の訳文を引用して忠之助訳の正確さを浮彫りにしてみよう。

「一八七二年のこと、バーリングトン・ガーデンズの、サヴィール・ロウ街七番地にある邸宅に、——その家でシエリダンが一八一六年に亡くなったのだが——革新クラブの会員で、自らは人目をひくことを極力避けていたものの、奇人として注目的となっていたフィリアス・フォッグ氏が住まっていた。」

なお、明治三十年、三崎座で八幕の芝居に仕立てられて上演されたことを付記しておく。（『作品にみる東西文学の接点』早稲田大学出版部）



『新説八十日間一周』扉
(早稲田大学図書館蔵)

川島忠之助は日本における翻訳文学史に輝ける地歩を築いた人物のひとつであるが、私はさらに黎明期の佛蘭西學を生きた人物としてその歩いた道を跡づけてみたいと考える。

従来、川島忠之助に関する研究はきわめて少なく、柳田泉「川島忠之助傳」(『明治初期翻訳文学の研究』春秋社 昭和十年九月)と忠之助の長子・川島順平「父・川島忠之助」(『比較文学年誌』十号、昭和四十九年三月)がある程度である。後者は前者の伝記的叙述を踏ま

え、子の立場から忠之助を語ったものである。

柳田泉氏は直接忠之助から聞き書きしてその伝記を草したのだが、忠之助にも若干の記憶違いがあったのか、改めて調べてみると、必らずしも全面的に信用しがたい個所もあるようで、私としてはすぐれた伝記研究としてこれを認めつつも私なりの調査に基いて川島忠之助の歩いた道をたどってみたいと思う。とはいえ、文献・資料の類が乏しいために、柳田氏の研究に多くを負わなくてはならないこともまた否めないのである。



川島家累代の墓 (青山霊園)

川島忠之助は嘉永六年(一八五三)五月三日、江戸本所外手町に川島奥六知脩の三男五女の末子として生まれた。生地に関して柳田氏はいま記したように本所外手町をあげているが、川島順平氏は「江戸本所・小梅の小さな屋敷」と述べている。

川島奥六は幕府の御料所の手代であったと柳田・川島順平の両氏とも確定している。

御料所は幕府直轄地、いわゆる天領を管理する代官所のことであった。

幕府料所の陣屋というのは、幕府の代官、または郡代等の在勤する郡衙なり。但し国々にありしものは大抵陣屋と称せしかど、江戸にありしものは、屋敷、京都・大坂にありしものは役宅などといえり。また幕府の料所を預る所の大名の事務所を陣屋または御用達所とも称せり。(『徳川幕府の制度』)

御料所は当時の日本が六十六国二島に分れていたうち四十八国にわたって置かれていた。すなわち畿内(山城、大和、河内、和泉、攝津)、東海道(伊勢、三河、遠江、駿河、甲斐、伊豆、相模、武蔵、安房、上総、下総、常陸)、東山道(近江、美濃、飛騨、信濃、上野、下野、陸奥、出羽)、北陸道(越前、加賀、能登、越後、佐渡)、山陰道(丹波、丹後、但馬、石見、隠岐)、山陽道(播磨、美作、備中、備後)、南海道(讃岐、伊豫)、西海道(筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向)八道四十八国である。

御料所には普通、代官または郡代の下に元締二人、手代または手付八人、書役二人、侍三人、勝手賄一人、足輕一人、中間十三人、計三十人が配置されたようである。手代は庶民、つまり武士以外、手付は武士から採用されるのが一般であった。手代は採用されるや武士と同じ待遇を受けた模様である。

とすると、「御料所手代」という職務がいささか問題となる。

私は手代というので、さぞ身分の低い役人と思っていたが、話によれば代官の次にくる役職で勘定方の親方だったという。(父・川島忠之助)

川島順平氏は御料所手代に言及してこのように書いているが、代官のつぎの役職は元締であって手代ではない。

岡村利平編『飛騨編年史要』の天保十年(一八三九)の項に、

「十月二十八日。豊田藤之進友直、飛騨郡代に任ぜられ、柴田多羅尾より事務引継を受け、川島奥六を以て元締と爲す。」

という記述がみられる。これによると、川島奥六は元締であって手代ではなかったこととなる。柳田泉氏も「旧幕府御料所手代」であつたと記していて、忠之助出生のときは「代官増田作左衛門の配下に属して江戸詰であつたが、方々の遠国勤務が厭になりまた健康も思わしくないところから、一時名代を立てて役を辞し、下総葛飾郡行徳在の浦安(字猫実)に川島氏の名義で数畝の田地を購ひ、傍ら地引網の漁業を始めて、半農半漁の生活に隠れんとした。これは川島氏の三歳の時であつたという」と説明している。

忠之助が生まれた嘉永六年の時点では、飛騨の郡代は福王三郎兵衛忠篤であり、その任期は嘉永五年九月から安政五年二月であつた。増田作左衛門頼興が郡代になつたのは福王の後任としてであり、安政五年四月から元治元年六月まで在職した。

川島奥六は半農半漁の生活を浦安で過していたが、安政四年の大暴風で津波のために漁船漁具の一切を流失してしまつたと、柳田泉氏の文章は伝えているが、川島順平氏はこれについては「祖父は早晩、幕府が尊王派の諸藩と戦を交じえることを予測し、家系の絶えるのを恐れて、浦安に田畑を買ひ、三男の父を百姓忠之助として届出た」と述べられている。

一方父君の名代を勤めていた川島氏の従兄弟に当る人が、公金の引負をこしらえるという始末。それで父君も我を負つて、再び役人に帰ることになり、当時新たに飛騨の高山の郡代に抜擢された増田作左衛門の手に属して高山に赴任したのは、安政六(一八五九)年である。川島氏も父君に三四カ月遅れて兄君、姉君などともに高山に赴き、慶応二(一八六六)年十四歳の春まで同地で成長した。(川島忠之助伝)

祖父が飛騨の高山の代官所に勤めていたのは、安政六年から病没する文久三年までである。(父・川島忠之助)

川島奥六が高山に赴いた年については柳田氏も川島順平氏も安政六年としているが、さらに前者ではその死亡年、後者では忠之助の高山

滞在切り上げの年にも言及している。

『飛驒編年史要』の弘化二年（一八四五）の項にまず四月八日郡代が豊田藤之進友直から小野朝右衛門高福に代わったことが記されたあと、

「六月二十九日。豊田の高山詰元締川島奥六より、地方演説書、木方演説書、公事方演説書を以て、小野の手代進野禮太郎外一人の事務引繼をなす。」

と綴られている。『飛驒編年史要』ではこのように川島奥六がすでに天保・弘化年間に飛驒高山に着任していることがあきらかにされている。この『飛驒編年史要』はつぎに安政五年（一八五八）の項において川島奥六の名を記載している。

二月十日に郡代福王三郎兵衛が免職となり高山を去り、同月二十一日飛州大地震が発生したことを記録したあと、新郡代増田作右衛門頼興が着任したことを伝えている。

四月十二日。増田作右衛門頼興、飛驒郡代に任ぜられ是日元締川島奥六外十一人高山へ着す。

五月二十八日。増田郡代、高山へ着任し、福王の手代より事務引繼を受く。

川島奥六は結局、ふたたび高山に増田郡代の元締として赴任したのであり、柳田泉、川島順平両氏は再度の高山赴任を初めて赴任と思いが違っていたわけである。いや、忠之助自身がその父・奥六の経歴をそのように理解していたというべきであろうか。それに高山着任の年月も一年間違えている。安政六年ではなくて同五年に高山に再度着任したのである。増田郡代は元治元年（一八六四）六月二十八日に転職し、高柳小三郎元暉がその後任となった。

川島順平氏によれば、川島奥六は文久三年（一八六三）に病没しているから、増田郡代転職のときにはすでにこの世を去っていたわけである。

川島奥六が仕えた二人の郡代について触れるまえに、飛驒高山の行政史上の沿革に一瞥しておきたい。

幕府直轄地となる以前は高山藩であった。藩祖・金森長近は織田信長と豊臣秀吉に仕え、天正十四年（一五八六）八月、秀吉から飛驒平定の功によって飛驒一国三万六千七百石をあたえられて高山に入った。

以来、可重、重頼、頼直、頼業、頼峯と六代を重ねた。とりわけ三代藩主・重頼は新田ならびに鉾山の開発に力をそそいだ。だが、六代の頼峯の治世下のとき、元禄五年（一六九二）、頼峯は徳川幕府の命で出羽上山藩に移封され、高山藩は廃されてしまい、幕府直轄となった。

これは幕府が諸国鉾山の開発と主要鉾山の直轄化を計る政策に基く処置であったが、同時に尾張藩に木曾の森林をあたえたことで飛驒の山林を確保する必要に迫られたことでもあった。

金森出雲守頼峯が飛驒国を収公されて出羽国上山へ移封を命じられた元禄五年七月二十八日以後、飛驒は幕府の直轄地として百七十七年間、二十五人の代官および郡代によって治められた。その間には十一度にわたり臨時時代官も置かれた。このように為政者が頻繁に代わっていたということにはやはり注意が惹かれよう。必らずしも治政状態が平穏でなかったというべきであろうか。明和（一七七二）年には飛驒大原騒動、大一揆が起きていることをとくに指摘しておく。

さて、『高山市史』には歴代の代官・郡代の氏名リストとその簡単な略歴が記されている。川島奥六にかかわりをもつ郡代二人に関する記述を引用しよう。

第二十代 豊田友直

通称藤之進。天保十年十月飛驒郡代に任ぜられ、弘化二年四月二之丸御留守居役に転じた。天保両度の大饑饉の後を承り、備荒倉（郷倉）を設けて蕃穀の令を定め、幕府の天保大改革の方針に基づき厳に儉約令・風紀の取締を実行せしめた。山林天保個所附帳の完成、消防出初式の創始、瀬戸洪草焼を起業した事など見るべき政治が多かった。

第二十三代 増田頼興

通称作右衛門という。嘉永元年丹後国久美浜代官、同六年大阪鈴木町代官、安政四年関東代官を歴任した。同五年四月飛騨郡代となり、五月着任事務引繼を受けた。これより先三月二十六日飛騨の北部に大地震があつて、倒潰七百余人。死者二百余人を出した。頼興災害復旧につとめた。前任福王郡代について、高山銀吹所の経営に當つて成績を上げた。万延元年七月御林山銅鉛山取締を置いた。文久の末年京畿に於て浪士跋扈の聞えあるので諸口番所の警備を厳にした。元治元年三月御勘定吟味役に転じた。慶応元年閏五月横須賀に製鉄所及製艦事業を創設するに當り、委員の一人となつた。同二年二月十八日歿した。年六十一。増田頼興を徳として建てた寿墓・中呂禅昌寺にある。室、瑞照院殿寂室淨光大姉の墓、雲龍寺にある。

川島忠之助は父・奥六の赴任二、三カ月後、飛騨高山に入つた。忠之助六歳(數え年)のことであつた。この時期の忠之助の記憶は幼少のためにきわめておぼろげで、他愛のないものだらうであらう。

何分にも父の高山時代は幼少だったので、私に聞かせた思出話もたわいのないことばかりだ。寒い土地なので宮川にかかる橋の擬宝珠に舌先をつけて、凍りつく遊びに興じたとか、漢文の素読に通わされて閉口したという程度の話ばかりである。江戸から高山へ行く途中、和田峠の關所で、前をまくらせ、男の子という証を見せたよと父は笑つた。『入り鉄砲に出女』の禁制があつたためである。(父・川島忠之助)

だが、高山郡代所は忠之助の想い出のような微温的な御役所ではなかつた。前述したように大原騒動、大一揆も起きたところである。川島奥六が仕えた豊田郡代の許でも、天保十一年、凶年手当として毎年百石に對して金一兩一分ずつ徴収して米穀を購入し、郷倉に貯えるやりかたをしたので、「百石五粒の法」とこれを称し、一般から激しい怨嗟の声が聞かれたと云う。年貢の取立てがきびしかったのである。

高山の代官所は年貢の取立てが苛酷で、百姓一揆に襲撃をうけたこともある役所だつたが、祖父の時代は平穩無事であつた。祖父は武芸の方は全然駄目で、漢学や国学をおさめ、和歌もたしなんだという。ただ面白いのは、漢方の医術をたしなみ、近隣の人に投薬したというし、日本に導入されたばかりの種痘に

興味をもち、天然痘患者のかさぶたの細片を貰つて、これを自分の子女の鼻腔から吹きこみ、種痘をしたと父は語つていた。(父・川島忠之助)

川島奥六が任地高山で病没したことは川島家には大きな衝撃であつた。この奥六という人物はそもそも吉江家からの養子であつたといふが、学問もあり、かなり時代的先見の明もあつたやうで、前述のごとく家系の絶えることを怖れて三男の忠之助を百姓忠之助として届出たのであつた。浦安に田畑を買つていたことは奥六の急死に遭つた川島家には一つの救いとなつたのである。

祖父が高山の任地で病死したことは、一家にとつて大痛手だつた。父の兄は年少過ぎて、仕官もできない。やむなく浦安に移つて百姓仕事をしていたといふ。私の家には父の兄が慶応二年に幕府に仕官を嘆願した文書が残つていふ。さぞや父の一家は窮乏していたのだらう。(父・川島忠之助)

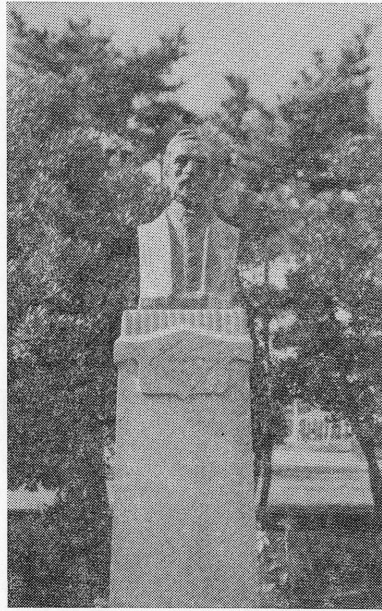
川島順平氏は祖父奥六が高山で文久三年病没したことを伝えていふが、柳田氏の文章ではつぎのように記述されている。

その慶応二年父君(奥六)が病死されたので、家族一同江戸を引き上げることになり、川島氏も江戸に帰つた。元來父君は漢方の医術を好み、求める人があれば投薬などしていたが、一つには当時世間が穏やかでなく、次第に險惡に赴いていく風が見えるのを察して、二人の男子を土籍に置くことを望まなかつたところから、末子の川島氏には医学を修めさせようとの意志をもつておられた。しかし当時高山のような土地では、なかなか医学の研究など思ひも及ばないことであつたから、遂に果てなかつた。江戸に出て間もなく兄君は家を浦安に移して、浦安の旧田を耕作し、川島氏にはその名義代として若干の修業費をくれるといふことになつた。川島氏は、江戸でお定まりの漢学を勉強する傍ら、時勢柄兵式訓練にも加かつて、小銃をいじつたりした。江戸に帰つた始めは、父君の遺志通り医学でも研究するつもりであつたらしいが、世間の騒々しさに何らまとまつた学問をされる暇もなかつたであらう。そのうち問もなく明治維新となり、徳川幕府の瓦解となつた、これが川島氏の十六歳のときに當る。(川島忠之助伝)

長々と柳田氏の文章を引用したのはほかでもない。川島順平氏と違つて柳田氏は昭和元年九月頃直接忠之助から話を聞いて『川島忠之助

この嫁ぎ先の家も全部扶持から離れ、路頭に迷うという有様だった。幸いに父にはよき先輩の従兄がいた。中島才吉といつて、幕府の末期、横須賀の製鉄所でフランス語を学び、幕府の通訳を勤めていた。その人の勧めで明治元年、この製鉄所に製図見習工となった。(父・川島忠之助)

川島忠之助が後年ジュール・ヴェルヌ『八十日間世界一周』を翻訳するようになる最初の機縁は横須賀製鉄所に製図工見習工として明治



ヴェルニー像 (横須賀臨海公園)

元年末に入ったことであつた。忠之助がフランス公使レオン・ロツシユの建言で創設された横須賀製鉄所に職をえたことはいわば忠之助とフランスとの出会いであつたのである。

元治元年十一月頃、ロツシユは、幕府の承認を得て、横濱の山手に一萬八千方米の地域を賃借し、兵舎病院・石炭庫等を具備した海軍館を建設し、列國公使をして、本國政府のメキシコ遠征に利用せんとする底意ではないかとの疑惑の眼を張らしめた。略々これと同時に、幕府の軍艦翔鶴丸修理の依頼を受けて、碇泊中の佛艦ゲリエール號乗組の士官・職工の手に依つて、これを完成せしめた。幕府が船渠及び製鐵所建設の議を決するに及んで、「海外各國 概ね倨傲不遜にて、我を恐嚇し、其不馴を欺き、飽迄、利を貪らんとするのみなれど、唯、佛國は異順にして他に比すれば、其説も稍信するに足れば云々」遺稿との理由で、小栗忠順上野から栗本鯤に談じて、ロツシユにその建設を委

嘱するに至つた。ロツシユは、デョーレス少将と議り、當時、清國の寧波に在つた海軍技師ヴェルニーを横濱に招いて、これに設計を命じ、横濱に小規模の工場を設ける外、佛國ツローン造船所の規模三分の二に相當する工廠を、横須賀の地を相して新設する協議が成立し、翌慶應元年正月二十九日、老中水野忠精和泉・若年寄酒井忠叱飛騨から、工事の一切を佛國に委嘱するの約定書をロツシユに交付したのである。(大塚武松『幕末外交史の研究』)

幕府は独立国家として軍備整頓上不可欠の施設として工廠の創設を急いだのだが、独自にはそれを創設できず、外国に援助を求めなくてはならなかつた。安政以来外国から数隻の軍艦を購入したが、「彼我我ヲ侮瞞シ敗戦ヲ粉飾シ以テ與フモノ多シ」(『横須賀海軍船廠史』) というように苦い味を嘗めなくてはならなかつたのである。そこで比較的信用できるフランスを撰んで工廠建設の技術援助を依頼したのである。幕府が正式にフランス公使レオン・ロツシユに技師招聘の周旋を依頼したのは元治元年(一八六四)十一月十日のことであつた。

是ニ於テ幕府議ヲ定メ造船所及製作所ノ創立事項ヲ擧ゲテ一ニ佛國公使ロセスノ斡旋ニ依ルベキモノトシ老中水野和泉守阿部豊後守諷訪因幡守ヲシテ奉書ヲ以テ其旨ヲロセスニ傳ヘシム是ヲ横須賀製鐵所設立ノ濫觴トス實ニ元治元年甲十一月十日ナリ(『横須賀海軍船廠史』)

工廠建設の場所として横須賀が選定されたのは地形がフランスのツローン港に似ていたからと云われる。もっとも、横須賀に決まるまでにはつぎのような経緯がある。

佐賀藩の鍋島齊正はオランダから蒸氣工作機械を輸入し、工場建設を計画したが、経費が巨額であることと技師の人材を欠いたことで計画を断念し、機械を幕府に献納した。幕府は相模の三浦郡長浦湾に工場を設立しようとしたが、やはり人材がないために実現しないのでいた。ところが、工廠建設の話になつた。そこで、ロツシユが十一月十二日に長浦湾の検分を申し出て、同月二十六日、小栗上野介、栗本鯤、

木下謹吾、淺野伊賀守など幕府側要員とともに実地検査となった。フランス側はジョーライス艦隊司令長官なども加わり測量したところ、長浦湾は浅いために不適當であり、さらに隣接する横須賀の方が湾形も深さも適當であるという結論に達したのである。

此日佛官自カラ投鍾シテ測量スルニ灣内淺渚アルヲ以テ更ニ隣灣横須賀ニ至リ之ヲ鍾測ス本灣ハ灣形曲折海底稍々深ク具其地ノ形勝要害ハ佛國ツイロン港ニ彷彿スル所アリトシ終ニ横須賀ヲ以テ造船所設立ノ地ニ適スト爲ス十二月二日更ニ軍艦組長田清藏以下八名ヲ遣ハシテ横須賀水陸ノ測量ニ從事セシム
〔横須賀海軍船廠史〕

ところで、工廠の建設費は「年額六十萬弗、四カ年繼續、總額二百四十萬弗或は四百萬弗」（大塚武松『幕末外交史の研究』）という巨額であった。とはいへ、この金額は老中が予定した金額の半額以下の費用であったという。

慶応元年一月二十九日（一八六五年二月二十四日）、幕府は老中水野忠精、若年寄酒井忠毗が連署した工廠建設の約定書をロツシユに交付した。

製鐵所約定書

今般横須賀灣ハ佛蘭西國ノ周旋ニ依テ製鐵所ヲ取建ルニ付公使ハ商議セシ處上等機械官ウエルニ最モ其技ニ長ジタル故ヲ以テ薦揚セラレ「アドミラー」厚情ヲ以テ上海ヨリ右ウエルニ「呼奇ラレ」同意シタリ之ニ依テ爾後ノ爲メ約スル處ノ條目左ノ通り

- 一 製鐵所一箇所修船場大小二箇所造船場三箇所武器藏及役人職人等ノ役所共二四箇年ニシテ落成ノ事
 - 一 横須賀灣地形地中海岸ツイロン灣ニ似タルニ寄リ製鐵所ハ右地方ニ取建アル模式ニ倣ヒ大概横四百五十間堅二百間ノ地坪ヲ以テ取建ル事
 - 一 製鐵修船造船ノ三局取建諸入用總計凡高一箇年六十萬「ドルラル」都合四箇年二百四十萬「ドルラル」ニテ落成ノ事
- 但佛蘭西政府ヘ約定書相届候上ハ右ノ六十萬「ドルラル」取揃置ベシ猶四箇年ノ間年々納方「ドルラル」差支不申様可致事
- 右ハ兩國政府ノ允准ヲ經テ公使ニ於テハ其上等器械官ウエルニニ專任ヲ命

ゼラレ我等ニ於テハ勘定奉行松平對馬守、軍艦奉行木下謹吾、目付山口駿河守、栗本頼兵衛并淺野伊賀守ニ專ラ其取扱ヲ命ジ只願成功ヲ要スルモノナレバ互ニ彼我内外ノ間隔ナク懇誼ヲ本トシテ取極ルモノ也
元治二丑年正月二十九日 水野和泉守 花押
酒井飛騨守 花押

横須賀製鐵所の建設は幕府の親フランス政策の最初の大きな具現として注目される事業であった。フランス外相ドルマン・ド・リュイスもロツシユの要請に対して、工廠建設を原則的に承認し、条件次第で指導者など人員の雇傭や資材の購入に協力する旨の訓令をあたえている。

元治二年正月、フランスア・レオンス・ヴェルニーが上海から来日し、工廠建設の技術指導の任に當った。ヴェルニーは一八三七年十二月二日、フランスのオーベナル・デシユに生まれ、理工科大学を一八三七年に卒業し、フランス政府の命令を受けて清国の上海で砲艦製造に携わり、その完成で帰途に就かんとしていたところ、この工廠建設で来日することになったのである。フランス海軍に属する技術者であった。

幕府はヴェルニーの到着により、ロツシユ公使たちと協議を重ね、横須賀製鐵所設立原案を作成した。八節に分れる設立原案である。

ヴェルニーの来日は上海からフランスに帰国するにあたり、横浜に赴き、そこで工廠建設に都合のよい場所の選定、費用の概算などの下準備でもあったわけで、人員の雇傭や資材の購入は幕府が使節を派遣して交渉するというロツシユ公使の手筈にのっとったものであった。

横須賀に製鐵所を作ると同時に横濱にも小規模な製鐵所を建設するという計画で幕府はそれぞれフランス人を雇入れ、実現を目指した。

元治元年正月三十日、フランス海軍の技工ウエットを横須賀製鐵所に月給百五十ドルで總鑿頭目として採用し、二月二十三日に海軍武器係

マルタンを横濱製鐵所警査係として月給六十ドルの条件で備うことにし、ここに初めてフランス人を雇備することとなった。横濱製鐵所の方は、同じ年八月に竣工したが、幕府は工事に先だつて両製鐵所の責任者ヴェルニーとドロートルの服務規定書を定め、これに署名させた。つぎに引用しよう。

佛國海軍技士ウエルニーハ横須賀製鐵所設立圖案ヲ製シ佛國公使及艦隊司令長官ノ檢閲ヲ經テ日本政府ニ呈シ而シテ一時佛國ニ歸リ其政府ニ向ヒテ日本横須賀製鐵所首長タルノ裁可ヲ請フベシ既ニ其裁可ヲ得バ日本理事官ノ佛國ニ着スルトキヨリ凡百ノ事項ヲ周旋シ以テ製鐵所設立原案ニ掲グル首長ノ職事ヲ勤勉スベシ

横須賀製鐵所ノ完成ニ至ルマデハ其職事ヲ執ル固ヨリ日本官吏ト差異アルベカラズ故ニ佛國政府ノ俸給ヲ辭シ之ヲ日本政府ヨリ受ルモノトス其俸給ハ公使ノ裁定スル所ニ據リ年俸洋貨一萬弗トス尚ホ服務ノ實況ニ因リテ増額スルコトアルベシ今回一時佛國ニ歸リ前項ノ手續ヲ經テ首長ノ職ニ就キ而シテ歸國中ハ横須賀製鐵所ニ備附クベキ機械ヲ購入ノ爲メ各地ニ往復スル旅費ト後日再ビ日本ニ來航スル旅費トハ其俸給ヲ以テ之ヲ支辨スベシ他年解雇歸國ノトキモ亦然リ若シ日本政府ヨリ旅費ヲ給スルトキハ俸給ヲ半減スベシ但過般上海ヨリ來航セシ旅費ト今回佛國ニ歸航スル旅費トハ其就職以前ニ係ルヲ以テ別ニ洋貨千弗ヲ支給スベシ

今回歸國ノ後若シ止ムヲ得ザル事故アリテ日本政府ノ聘ヲ辭シ再ビ來航セザルガ如キコトアルトキハ日本派出ノ理事官ニ稟議シ更ニ製鐵所設立事業ヲ負擔シ得ベキ優等ノ技術ヲ撰拔シテ既定ノ條款ヲ遺漏ナク引繼キ其設立上ニ於テ取テ障礙スル所アラシムベカラズ

佛國海軍士官ドロートルハ横濱製鐵所ノ首長タルベシ故ニ同所ノ設立方案及圖面ニ據リテ之ヲ完全竣成スル爲メ凡百ノ事業ヲ負擔シテ今ヨリ一箇年半職務ヲ勉勵スベシ其俸給ハ公使ノ裁定スル所ニ據リ年俸洋貨四千二百弗トス但之ヲ月數ニ割賦シテ支給スベシ

前項設立工事ヲ起スニ當リ佛國工手ヲ僱役スルヲ許スト雖其人員ハ三名其月俸ハ一名百弗ノ割合ヨリ超過スルヲ許サズ而シテ常ニ日本譯官ト起居ヲ共ニシ其通譯ノ便ヲ圖ルベシ且在職中ハニ製鐵所ノ事務ニ服シ尙モ商賈販賣ノ事ニ關スベカラズ

日本政府ヨリ横濱製鐵所需用品ノ檢査トシテ其產出地ニ派出ヲ命ズルトキハ其命ニ從フベシ旅行ノ費用等ハ俸給ノ外別ニ之ヲ支給スルモノトス而シテ其派遣地ノ開港若クハ開市場ニ非ルトキハ必ズ横濱駐劄佛國領事ニ届出ゾベシ

首長ハ職事ニ就キ若シ日本官吏ト見解ヲ異ニシ諍議ヲ生ズルトキハ横濱駐劄佛國領事ノ判決ヲ請フベシ尙ホ覆審ヲ要スルトキハ公使ノ處斷ヲ採ルモノトスこの服務條約のあと、翌二月四日にはロッシュ公使から製鐵所の構造図甲乙が提出されたので、これを幕府の委員によって検討し、横須賀製鐵所の敷地として横須賀、白仙、内浦の三湾を埋め立てて、七四、三五九坪強の土地を決定した。甲図とは製鐵所構造全図であり、乙図は前述の服務條約で一旦フランスに帰国するヴェルニーの留守中に日本側委員が竣工、完成させるべき土木工事の一部の図であった。残念なことに甲図は散佚していまに伝わらない。

さて、幕府は慶応元年四月二十五日、外國奉行柴田日向守を製鐵所設立原案第八節記載の事項にのっとつて製鐵所設立に関する談判の全權委員としてフランス、また、べつにイギリスに派遣することを決めた。柴田日向守剛中は同年閏五月五日渡欧の途について、その公式使命は「仏・英兩國の工業を視察し、そこで便利と思われるような買物をする事、および兩國政府に日本陸海軍の教官を求めらるることにありとされている」(石井孝『増訂明治維新の國際的環境』)けれど、じつはフランスで資材を調達し、工廠設備に必要な人材を集めることにこそ其の主要目的であった。

ヴェルニーは建設の第一着手を建築と考え、フランスから建築課長レノワ、頭目ジユモン、職工バスマチヤンを工作機械とともに先発させ、一八六七年一月二十六日横濱に上陸させている。ヴェルニー自身も残余の雇入れ、落成した工作機械の処理など残務処理ののち、四月二十五日に横濱に到着した。

小栗上野介はフランス人の住居の建設を急がせたが、ヴェルニーもまず宿所の建築から着手した。

營造物建築は首長官舎(八二五坪)・醫師官舎(五二坪)・集会所(七四坪)を三月に、また五月には三次長官舎(平家二棟(二〇八坪))・妻子携帯の頭目以下官舎

(平家三棟(一三三坪)・頭目以下官舎のほかに製綱工場(坪九三二)の建設、七月には学校(坪三三三)・厩(六八坪)にそれぞれ着手し竣工をみている。

他方四月には製鉄所敷地内農家の移転(二二戸に対し)を行い、五月七日には初めて伝習生を採用し、また横須賀建設のために横濱から資材を輸送せねばならぬため(新造には六カ月を要す)六月二日アメリカより小汽船の購入(洋貨三〇三七弗五五分五文に当る)を具申し、二八日裁可を得た。会所に「横須賀、横濱間定期航海規則」を掲出し、初めて定期航路が開通した。(『横須賀市史』)

ヴェルニーは製鐵所用の引船として小汽船の新造にも着手し、三十馬力船、十馬力船二隻を横須賀製鐵所で製造した。前者は横須賀丸と称したが、機械はフランス製であった。後者の機械は横濱製鐵所製であった。

工廠建設は幕府にとつて財政多端な折柄きわめて大事業であつたが、海軍力を確立するには軍艦保有は不可欠の使命であり、その製造と修履に必要な製鐵所の設置にあつて極力計画を推進させた人物・勘定奉行小栗上野介忠順の存在を見落してはなるまい。百年の大計のために小栗上野介はあらゆる反対に敢然と戦い、信念を貫いたのであるが、この小栗を助けて粉骨碎身した栗本鯉の存在を忘れてはなるまい。

ことに小栗忠順が栗本瀬兵衛と互に語つて栗本瀬兵衛が「予猶其巨費の如何を憚りたれば、仔細商量あられよ、今に於ては為すも為さるも我に在り、既に託せし後は復た如何す可からず」というと小栗忠順は笑つて「当時の経済は真に所謂遣り繰り身上にて例え此事を起さざるも、其財を移して他に供するが如きにあらず、故に無かる可らざるのドンク修船所を取立ると成らば、却て他の冗費を節する口実を得るの益あり、又愈々出来る上は旗号に慰斗を染出すも猶ほ土蔵附売家の榮譽を残す可し」と語つてゐる。(中略)これと同時に巨費を造船所に当てようと決意した當時を、栗本瀬兵衛の言がその当事者としての衷情をひれきしている。「海軍部下の者は、政府の旨趣の何たるを解せず、其之を仏國に委するを曉々し、他向の論者は無用不急の務なりと欺々し、大計に暗き迂儒武人杯の類は極口罵言して咄々怪事とする輩もありて、百方之を毀ち壞

らんと欲する者のみなりしが、其事の決定は既に数月前に在るを以て、総て事後の論なれば一切取合す」と物語つた。(『横須賀市史』)

一方では、横須賀の近郊に衛所と見張所を設けてフランス人に対する日本人の暴行などを警戒させるといふ配慮もみせ、横須賀製鐵所の建設の促進を計つた。フランス側もロッシェ公使とヴェルニーの尽力によつて自國の政策の遂行にあたり、幕府と緊密な連携を保つた。

当時の横須賀の日本人たちがフランス人をどのように受け入れていたかを知る上で、つぎのフランス人、ジャン・ラウルの文章はすこぶる興味深い。

建設中の工廠の周囲に屯した小さな植民地は自然一種の習慣を作り上げた。佛蘭西から来た遠来の民と日本人の家族とが頻りに接觸して生活して居る結果両者は不思議な程融和し合つた。それは日常生活に於ける仕事の上の接觸と同様に家庭の接觸は横須賀の創造と結びついて離れぬ一箇の事実であつたのである。(『横須賀海軍工廠の創設と佛蘭西人に見たる黎明期の日本』)

横須賀製鐵所はフランスの技術導入によつて建設されたのであり、当然フランス人たちが日本の地で生活したのである。この事實はフランス人と接觸する日本人との間に言語上のコミュニケーションの問題をもたらししたのである。フランス人が日本語を習得するのではなく、日本人がフランス語を学び取るという問題が両者の力関係で生じてきたのである。

横須賀製鐵所の建設が、佛國人の掌中に歸した結果、これに關與すべき幕吏に佛國語の習得が緊要事と爲つた。ロッシェは、幕府に對し、製鐵所必要な通辨の養成と諸科學の學習に資すべく、横濱に佛國語學校の開設を勸説し、有能な通辨、有爲な外交官の養成には、少青年代より教養するの得策なるを力説し、自己の指導下に幕府麾下の俊才を集める事に成功した。(『幕末外交史の研究』)

横濱佛蘭西語傳習所についてはすでに拙著『佛蘭西學のあけぼの——佛學事始とその背景——』(カルチャー出版社)で述べたので、ここでは触れないが、その開校は慶応元年三月の頃とみなされるので、

当面の役にはたたなかつた。幕府は製鐵所内に「他年内國人ヲシテ佛人ニ代リテ造船事業ニ當ラシムル爲メ造船所内ニ學校ヲ興シ以テ技士及技手タルベキ人材ヲ養成スベシ」という横須賀製鐵所設立原案の第五節に基いて学校を作ろうとしたのであつた。だが、早急にはこれも作れるものではない。まず最初に必要なのはフランス語が話せる日本人がいなくてはならないことである。そこで、幕府はすでに多少ともフランス語を解する人材を集めることにして、立廣作を譯官に、田中周太郎を伝習生兼訳官に、さらに河合捨吉、齋藤寅吉、坂本雄次を傳習生に採用した。だが、この程度の人数では製鐵所運営には絶対数が不足である。この頃、フランス語を修めた人たちはきわめて少数であり、結局、ようやく授業も踏道にのり始めた横濱佛蘭西語傳習所や幕府の洋学研究の最高機関である開成所に人材を求めることとなつた。慶応二年六月七日、製鐵所委員の上申を経て、前者から羽太恒三郎、中神伴次郎、松永福之助、高橋鑄三郎、後者から山高佐太夫を伝習生として迎え、さらに訳官として江目金太郎、原田鑑三郎、小野勝太郎、宮澤銚藏を選任した。

ところで、横須賀製鐵所設立原案第五節には「佛人頭目ヲシテ少年職工ヲ撰拔セシメ之ヲ技手生徒ト爲シ日々午前ハ工場ニ在リテ各自ノ本業ヲ修メ午後ハ學校ニ上リテ圖學其他必要ノ學科ヲ習肄セシムベシ」とあるが、これは横須賀近辺の各村から十才以上の少年を募つて「少年職工」とする計画であつた。その結果、「職工生徒」として横須賀村の農民・勝右衛門以下九名が応募した。このように農民の息子たちまで集めなくてはならなかつたところに「職工生徒」の募集の困難があつたようである。

製鐵所の学校では技士および技手の養成を目的にしたのだが、「少年士族ヲ撰拔シテ技工生徒ヲ置キ通譯部長ヲシテ其授業ヲ掌リ佛語及工學諸科ヲ講習セシメ工事課長モ亦本務ノ餘暇ヲ以テ之ヲ教授スベ

シ」(横須賀製鐵所設立原案第五節)というふうに年少の士族を対象に通訳を仲介して授業を行なう方法がとられていたことは注目してよい。つまり、フランス人の技術が通訳を経由して伝授されていたのであり、この時期の通訳の役割の重みがこれでよくわかるというものがある。

製鐵所の陣容の方も次第に整えられた。慶応二年十二月二十九日、ヴェルニーの要請で製鐵奉行が設置され、まず暫定的に土岐肥前守頼徳が就任し、翌年一月九日一色攝津守が奉行、古賀謹一郎が奉行並に任命され、全権委員が常置されるようになった。

しかし、この事業の最高責任者たる老中・若年寄等で、製鐵所設立に寄与した人は、老中では阿部正外豊後・水野忠精和泉・諏訪忠精因幡・松平宗秀伯耆・松平康直周防・井上正直河内・その他があり、ことに老中中、水野忠精は製鐵所掛として、創設当時すでに時代に洞察し卓見があつた。また若年寄では酒井忠毗飛騨・立花種恭出雲・京極高富正・服部常純筑前が製鐵掛として事務を掌執している。この間、製鐵所御用(後に製鐵所委員という)を命ぜられたのは一八六五年(慶応元)一月に松平正之対馬・山口直毅駿河・栗本瀬兵衛・木下謹吾・淺野氏祐伊賀の五人であつたが情勢の変転に従つてその増減がみられ、一八六六年(慶応二)には転免合わせて一六人ほどの委員があつた。わずか二カ年間に当初五人の約三倍に上るおびただしい人員の出入には、幕府がその末期に造船のみでなく、外交に繁忙を加え、海陸軍の設立等々目まぐるしいばかりの新時代への胎動の現実的な様相をみる事ができる。(横須賀市史)

横須賀製鐵所は幕府の親フランス派の尽力で順調に建設・整備されたのだが、幕府の瓦解に遭つて大きく揺れ動いた。

慶応三年二月二十四日製鐵所掛海軍奉行京極高富は若年寄を免ぜられ、勘定奉行服部筑前守常純が後任となつた。小栗上野介忠順は慶応四年四月官軍に捕えられ、上州烏川畔で斬られた。官軍が箱根を越え、四月には製鐵所奉行は横濱製鐵所と横須賀製鐵所を新政府に移管する

横須賀鐵所舊幕府官吏

職務	姓名	給額	職務	姓名	給額
製鐵所奉行	一色攝津守	高千石	調役	大橋宥之助	高百五十俵
製鐵所奉行並	新藤鋁藏	役高千石	同	村瀬源三郎	役金百兩
調役	伴野三郎	役高百三十扶	同	前島平十郎	同
改役	倉橋兼五郎	役高八十俵	改役	北村彌市	役高八十俵
同	仁井田源藏	役金七十兩	同	望月貞吉	役金七十兩
同	齋藤成三	同	同	山本月鍵三	同
同	榎本兼次郎	同	同	船越鉢太郎	同
同	大塚榮太郎	同	同	關永郎	同
同	鈴木濱之丞	役高四十俵持扶持	同	高橋八十郎	同
同	鈴木濱之丞	役高六十兩	同	木村善助	同
同	柴田増藏	同	改役兼通辯方	立村廣作	同
同	仁瓶三之助	同	通辯方	江目金太郎	高三十俵二人扶持外 二十五人扶持金五十兩
同	秋元熊之助	同	同	原田鑑三郎	不詳
同	具塚幸太郎	同	同	小野勝太郎	同
同	大村平九郎	同	同	宮澤銚藏	同
同	藤田彌太郎	同	同	田中周太郎	高二十人扶持 手當金三百兩
同	井村勝之助	同	同	福島時之助	同
同	井上耕助	同	同	羽太恒三郎	不詳
同	渡邊真一	同	同	松永福之助	同
同	白石民之進	同	同	齋藤寅吉	同
同	石原良藏	同	同	坂本雄次	同
同	小林晋藏	同	同	四十名	同

ことをヴェルニーに通告し、閏四月一日、神奈川県裁判所總督東久世通禧、副總督鍋島直大が横須賀製鐵所の受取りのために派遣された。新政府はロツシユ公使に従来のように製鐵所の運営を継続し、ヴェル

ニーには主任官・裁判所判事寺島陶藏宗則、井關齋右衛門盛良に旧製鐵所奉行同様にするように通告した。だが、製鐵所経費については節減を要望し、ヴェルニーと政府との合議によって経済的事項を決めて

川島忠之助について

いくというように製鐵所起立原案の修正を行なうことになったのである。

川島忠之助が横須賀製鐵所に製図工見習として入所したのはこのよ
うな時期のことであった。柳田泉氏と川島順平氏によると、忠之助は
従兄弟の中島才吉が製鐵所の通辨であったのでその紹介で明治元年末
に入所したという。だが、『横須賀海軍工廠史』の「横須賀製鐵所幕
府官吏」一覧には中島才吉の名はない。通辨方としては立廣作、江目
金太郎、原田鑑三郎、小野勝太郎、宮澤銚藏の五名がいるにすぎな
い。明治二年十二月の製鐵所官吏の一覧に「土木少佐 ^{判任三等} 中島才
吉」が記録されている。中島才吉は濱松縣士族で、明治元年神奈川縣
通辨出仕となり、同年十二月神奈川諸務試補譯官を経て土木少佐とな
った人である。才吉がフランス語に長じていたことは『横須賀海軍船
廠史』の明治三年の項に、

「四月七日管轄廳ハウエルニーノ供申ニ據リテ中島少佐、稻垣權少
佑ニ傳習生徒教育ノ學務ヲ專掌セシメ佛人教師ヲ補助シテ生徒ニ佛語
學ヲ教授セシム」
と記述されていることから判然としよう。ヴェルニーの信任もえ
ていたようであるが、中島才吉が明治二年には製鐵所に土木少佐の肩
書で入所していることは「製鐵所官吏及雇佛國人」なる下の写真中に
姿をみせていることで証明されるけれど、明治元年のいつ入所したも
のかはつきりしない。

中島才吉は落魄中の川島家を救わんとして忠之助を自分の関係する
製鐵所に迎えたようである。

この中島氏が、川島氏が幕府瓦解にあい、浦安あたりに逼迫して途方に迷っ
ているのを見て、それでは横須賀に來い、自分が世話をするからと勧めた。そ
こで川島氏は渡りに舟と（内心はともかく）横須賀にゆき、中島氏の斡旋で同
製鐵所の製図工見習となり、フランス語の勉強に熱心し、傍ら英語を修めた。

（第二册） 製鐵所官吏及佛人



シムトニ 長澤権雄 (3) 一ノガサ 長吉 (1) フクロウ 長澤榮雄 (4) オシエニ 長澤吉會 (11) 吉才島中 角少木士 (1)
シマタニ 職員製鐵工船 (8) ユーラヒ 日領工船 (4) 那三龍田原 方助進 (4) オノコトニ 日領工船 (1) 池多喜船 角少木士 (1)
ニシヤツ 職員製 (3) ニシヤツ 日領工船 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) シマタニ 職員製 (8)
ニシヤツ 職員製 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) ニシヤツ 職員製 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) シマタニ 職員製 (8)
ニシヤツ 職員製 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) ニシヤツ 職員製 (4) ニシヤツ 日領工船 (4) シマタニ 職員製 (8)

この時の製図掛長のフランス人某は、幕府時代伝習生を預ったこともあったの
で、見習工でも職工として待遇せず、あたかも幕府伝習生の復活した一人のよ
うに親切に取扱ってくれたという。（川島忠之助伝）

忠之助を製図工見習として指導したフランス人某とはメラング製圖
工長とみられる。慶応元年九月十三日、プレスト造船所二級上等技工
だったメラングは月給二百二十五ドルで横須賀製鐵所製圖工長に採用

製鐵所雇佛人去留者一覽表

氏名	職名	現給月俸	満期年月	去留	摘要
ウエルニ	佛國海軍大技士	八百三十三弗三三	千八百六十九年十二月一日	留	職務ノ改革ヲ要ス
サバチエ	佛國海軍大軍醫	四百十六弗六六	同年十二月八日	留	重要ノ職務ニシテ事ヲ處スル老練
ゴートラン	製鐵所醫官	四百五十弗	千八百七十年九月一日	同	職務ノ改革ヲ要ス
フロラン	工事課長	四百五十弗	千八百七十一年八月一日	同	職務ノ改革ヲ要ス
ルツサン	建築課長	三百弗	千八百七十年二月四日	同	職任ヲ重子俸給ヲ増スベシ
メルシエ	會計課長	同	千八百六十九年十一月十八日	同	横須賀ノ職ヲ廢スベシ横濱ニテハ未決
メラング	製圖工長	二百五十弗	同年十一月一日	去	改革若クハ廢止スベキ職務
モンゴルフイエ	書記兼倉庫主事	百五十弗	同年十二月二十二日	留	性質善良
ボエ	分折掛兼横濱製鐵所書記掛	同	千八百七十年二月一日	同	後任者ヲ要ス
デスパーギユ	建築課製圖職	二百弗	不詳	留	性質善良
ヂュモン	建築頭目	百六十弗	千八百七十年一月十二日	去	職務ノ改革ヲ要ス
ギルマン	鑄鐵頭目	同	同年二月十五日	留	性質善良
トロテール	鑄鐵頭目	同	同年四月一日	留	職務ノ改革ヲ要ス
レトロツト	鑄造頭目	同	千八百七十年四月一日	同	同
レオスチツク	船工頭目	百五十弗	同年三月十五日	同	同

された。明治元年の月給は二百五十ドルであった。だが、メラングの雇傭期限は明治二年十一月一日までで、同年二十一日帰国した。大藏省は三十ドルを在職中の功勞に贈った。

忠之助が少年技工として横須賀製鐵所に職をえたことは、日本仏学史の一出來事であったのみならず結果的には日本におけるフランス文学翻訳史の幕あけを準備するものであった。忠之助が職務上フランス

語を学習していかなくてはならぬ状況がここにつくられたのであった。なお、明治二年には製鐵所雇フランス人の契約期限満了の者が多数いたので、解雇または再雇用の問題が生じた。これに関して「製鐵所雇佛人去留者一覽表」が残されているのでつぎに掲げ、忠之助が接したフランス人たちを一瞥しておきたい。忠之助はこのような人たちの間にあってフランス語を身につけていったのである。

川島忠之助について

ダビース	製罐頭目	百六十弗	同年三月九日	去	後任者ヲ要ス
ウウツト	鑄造頭目	百五十弗	無條約	條約ヲ請フ	職務ノ改革ヲ要ス
ハレ	機軸副頭目	百二十五弗	千八百七十年一月二十九日	留	職務熟練
マンジユ	製罐職	百十五弗	同年二月十五日	同	同
コンスタンタン	製帆網頭目	百十弗	同年四月一日	同	身体虛弱
リツシヨニ	船具頭目	同	同年一月十九日	同	職務尋常
ビラール	泥工頭目	百五弗	同年四月一日	同	性質善良
ユード	石工頭目	同	同年四月十五日	同	職務熟練
アンケチール	製圖職	九十五弗	同	同	〔此二職中ノ一ヲ廢スベシ 二人トモ職務熟練〕
ジヨフレー	製罐職	百弗	同年二月一日	同	職務熟練
ルエラー	同	九十弗	同年三月二十日	同	技能精巧
コレヌー	鑿職	同	同年四月十五日	同	同
シヤツペー	同	同	同年四月一日	同	同
スーデー	製罐職	八十弗	同	同	同
バスチヤン	船工兼製圖職	同	同年三月二十日	同	技能頗ル巧
プロン	鑄造職	八十五弗	同年一月十九日	同	技能尋常
グリツポー	同	八十弗	同年四月十五日	同	技能頗ル巧
ミツシエール	摸型職	九十弗	不詳	同	同
フロツク	製罐職	八十五弗	同	同	職務熟練
サラ	鍊鐵職	九十弗	千八百七十年四月一日	同	技能甚巧
ミツシヨ	同	八十五弗	同	同	職務熟練
デニエール	船工職	同	千八百六十九年十一月二十九日	同	技能頗ル巧
				同	性質善良



結局、忠之助は再契約して残留したレオスチック、ビラール、デニ
エール、ジョーフレー、マンジュ、ゴルデネー、シャツペー、ボン、
フロック、トロテール、ミツシヨウ、デュモン、アンケチール、スー
デー、リツシヨニー、コラー、ウエット、メーグル、メルシエなどに

ポ ン	同	七十弗	千八百七十年 三月十五日	同	技能尋常
ゴ ル デ ネ ー	同	八十弗	同年三月十五日	同	技能精巧
ペ リ コ ー	同	八十五弗	同年四月一日	同	無用ノ職務
リ ユ シ ヤ ニ ー	機 械 職	六十弗	無條約	同	技能中等
マ ル タ ン	警 査 掛	八十弗	同	同	性質善良
メ ー グ ル	鑿 職	八十五弗	同	同	技能精巧
イ ポ リ ツ ト	同 職 見 習	三十弗	同	同	技能尋常
サ バ テ イ エ ー	火 夫	五十五弗	同	同	新來者



小栗上野介 (横須賀臨海公園)

囲まれて仕事を続けたものと考えられるが、新政府の方針が定まら
ず、不安定な製鐵所には長く留まることもできなかったのか、明治三
年、一年足らずで辞め、横濱に出た。忠之助の少年期はここに終焉を
みたのであった。